

願成寺報

令和三年三月十日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎〇五三二・五二・九六〇一

春季彼岸・永代経のご案内

コロナ禍ですが、感染対策をして勤めます。

- ・出入口と窓を開けて換気します
 - ・お参りの際はマスクの着用を願います
 - ・堂内三〇名の人数制限をします
 - ・事前にご連絡下されば席を用意します
 - ・お斎（昼食）は残念ですが中止します
 - ・午前・午後共のお参りで
 - ・昼食にお困りの方はご相談下さい
- 異例ですが、しっかりと勤めて参ります。



透明アクリル板を設置します

本能と煩惱

どちらも定義が曖昧な言葉で、自由に考えるし、考えていただきたい。自由過ぎると收拾がつかなくなるので、この作文での定義を示します。

本能 動物に生来備わる性質で、個体内外の刺激に応じる為の行動原理
煩惱 人間の身心を煩わせ、悩ませ、かき乱し、惑わせ、汚す精神作用

少し調べてみましたが、煩惱は人間に特有の性質とされるようです。

そして、人間特有として理性（これも定義が難しい）も示されます。

理性 筋道を立てて物事を考える能力

筋道が一本道でない場合、理性こそ問題の種だと仮説を立てます。

煩惱とは、正しいかどうかの判断基準のない場合の理性である

完全絶対なる判断基準があれば、理性は本能となる（神の本能か）

私達は人間らしくありたいと願うほど、深く煩悩悩まなければならぬ。けれど、だから煩悩を手懸かりとして仏を捜し、遇うことができるのだ。

本能のみの生物は、既に仏と共にあり、仏を探す必要はないのだろう。

羨ましく思うが、仏に遇えた感動がないのは哀れである。

感動は向こうからやってきて、普段の景色を換えてしまいます。

「願う私が願われていた」仏の功德は、既に私の傍に溢れています。

その感動を伝え合うのが、理性を持つことで本能の樂園を失った人間の、その人間に与えられた特別な使命なのかも知れません。

煩悩や悩みこそ私達の生きる意味なのです。

その意味を疑ったり、酒や気晴らしに誤魔化したりしてはなりません。

友・先輩に同じ悩みがなかったか問い、その姿に学びましょう。

問題は解決しなくとも、学び続ける生き様が、他を導く事になる筈です。

撰取不捨の真言 超世の希有の正法 聞思して遅慮することなかれ

《親鸞聖人『教行証文類』総序より》

主 冊 十七日（水） 午後十時 餅つき・車取り会

三月 十九日（木） 午後一時半 法要のみ

二十日（祝） 午前十時 法要・落語、法話

正 午 お斎（昼食）

午後一時

法要・落語、法話

成田屋紫蝶師、住職

成田屋紫蝶師、住職

● 阿弥陀経ノート ②・序分・証信序

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

是の如く、我聞く。

一時、仏、舎衛国の祇樹給孤獨園に在して、大比丘衆千二百五十人と俱なりき。皆これ大阿羅漢にして衆に知識らる。

長老舍利弗・摩訶目犍連・摩訶迦葉・摩訶迦旃延・摩訶俱絺羅・離婆多・周利槃陀伽・難陀・阿難陀・羅睺羅・憍梵波提・賓頭盧頗羅墮・迦留陀夷・摩訶劫賓那・薄拘羅・阿尼樓駄、是の如き等の諸の大弟子。

竝に諸の菩薩摩訶薩の、文殊師利法王子・阿逸多菩薩・乾陀訶提菩薩・常精進菩薩、是の如き等の諸の大菩薩、及び釈提桓因等の無量の諸天・大衆と俱なりき。

〈仏説阿弥陀経・書き下し〉

- ・ 仏 覺りを得た者、ブツタ。ここでは釈尊のこと。
- ・ 比丘 戒律を守る出家の男子。女子は比丘尼。
- ・ 祇樹給・園 祇園精舎と略す。釈尊や弟子達の日常の居所。
- ・ 阿羅漢 八正道を行じて煩惱の迷いを断つた人、覺者。
- ・ 舍利弗 智慧第一と讃えられた釈尊の一番弟子。
- ・ 菩薩摩訶薩 菩薩に同じ。特に利他の成就を目指す大乘の行者。私達の心の深層にある道を求める心の象徴か。
- ・ 文殊・王子 文殊菩薩に同じ。智慧を代表し私に道を示す行者。
- ・ 阿逸多菩薩 弥勒菩薩に同じ。慈悲を代表し私の背中を押す行者。
- ・ 釈提桓因 帝釈天に同じ。戦士の守護神であり仏法僧を護る。
- ・ 諸天大衆 地上にはない理想の国(天)の住人。

・ 如是我聞

それぞれの命は「いのちの物語」を伝え合う媒質なのだと思う。機が熟せば、命は物語に感動し、その感動が他へ伝わる。だから、命はその機縁を注意深く待たなければならぬ。生活の現場での、常の読経にはそんな意味があると思う。

親鸞聖人は阿弥陀経を方便の經典と表現された。「生きる」という難事を經典に問い、物語の中に啓示を得て感動し、生き直しておられた。物語が史実かどうかは関係がない。問題は「何を聞き、どう生きるか」である。だから「如是我聞」の「我」は、法座に集まった命であり、漢訳者・鳩摩羅什や聖人、読み伝えてきた数知らぬ人々、そして私である。お経の響きは私に「目覚めよ」と常に呼びかけている。

・ 智慧の落とし穴

智慧第一の覺者である舍利弗が、仏道修行の樂園である祇園精舎で暗い顔をしていた。彼はその不安の正体を自分の智慧では見極められず、釈尊に問いかけることもできなかった。舍利弗の抱えていた問題については、これに続く釈尊の説法から明らかになる筈だが、少し考えておきたい。

天才は孤独だと聞く。比類なき知恵者は、その知恵を確かめ合う友がなく、孤独だったのかも知れない。

智慧の作り出した理想に囚われる。精舎は樂園だったが、その外側には差別や憎しみ、貧困と暴力など悲劇が溢れていた。縁に従って人々を教化しても、必ず外側に闇の世界が残る。それで良いのだろうか。樂園に安住できない不安は深かったと思う。

文殊菩薩や神々、諸天大衆の見守る中、釈尊は機を熟している舍利弗に向かって、静かに阿弥陀の法を説き始めたに違いない。



足立美術館より

創作・舍利弗と目連の別れ

釈尊がお亡くなりになる一年ほど前、その両腕と頼りにされた二人の弟子が相ついで世を去った。舍利弗は祇園精舎を美しく調べ、目連は東方精舎に活気を導いていたのだが、それぞれの精舎に、主が最後に残そうとしたものは何であつただろう。

目連は積極的に市中に赴き、人々の問題を解決していた。尊敬と親愛を集めると同時に、嫉妬や憎悪の標的でもあつた。ある日、彼は山中で賊に襲われ瀕死の重傷を負い、精舎に担ぎ込まれた。そこへ舍利弗が駆けつけた。

「こうなることは分かつていただろうに… 軽率だぞ。」

「よい香りがすると思えば舍利弗か、声に張りが無い。お互い老いには勝てんな。俺はこの頃、俺らしい滅び方はどんなものかと考えているのだ。それで、まずは教団への敵対心を減らしておこうと思つてな。身体をくれてやった… イテテテ、しかし痛いなあ。泣いてもよいか？」

「お前らしいが馬鹿だなあ。「何をどう残すか」については私も考えている。思えば子供の頃、村の祭りに虚しさを感じて「百年先まで残るもののために生きよう」と誓い合つたんだよな。お前と世尊に遇えて本当に幸せだった。最近はおも咳がひどくなつて、そう長くはないだろう。」

「泣いてもいいぞ。おれはこの涙の中に暖かさを感じる。痛みの中奥に心臓の鼓動を感じているんだ。そして、それが六字の合言葉を刻んでいる。願われていた… それを感じるんだ。」

「お前、成長したな。私もそのことを故郷に伝えに帰ろうと思つている。」

「あなたは何時も上からだな、俺はそれが悔しくて心残りだ… が、これが最後の別れだ。俺達がいなくなつたら世尊は泣くだろうか。俺の為に流す涙を見てみたい。同じ鼓動となつて泣いて欲しいなあ。」

「友よ。いずれ世尊を囲んで、仏の願いの中に出会いなせう。」

〈『ブッタとその弟子86の物語』法蔵館、他より創作〉

年賀状

「文字ばかりで楽しくない」と批評を受けたので、このコーナーはグラフィカルにしようと思つたけれど、センスがない。仕方なく、最近の年賀状を張り付けてゴマカシます。

私は年賀状を凝りたくて、だから嫌いで、いつも遅くなり、元旦に間に合つたことがあります。

それでも一生懸命に作っています。面白いと思つていただける場合、年賀状下さい、必ず返します。

* ご恩・大切なこと

大きすぎたり常にあつたり大切なことを

当たり前と感じてしまう私。

もつたいないと判つていても気が付けないから仕方ない。

だから気が付けないままに手を合わせます。

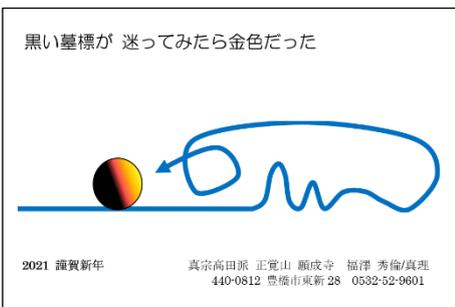
もつたいないと知つているから。

* 救いは何処に

いつでもどこでも誰でも、私の救いは何処にあるだろう。

救われた人の中ではないのかも。迷いの姿に共感する友が現れて、

その友が救われてくれれば…
それでよしとした人から救われる。



行事予定 〓令和三年春以降〓

十一月の月例会の開催日を変更しました、ご注意ください。

八月十五日(日) お盆・歓喜会(住職)

法要・法話で亡き人を偲びます
軽食・花火あり
午後六時〓

九月二十日(月祝) 秋季彼岸・永代経法会(戸田恵信師)

お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時(昼食)あり
午前十時〓 午後一時〓

十二月三日(水祝) 本山納骨堂法会・団体参拝

本山へ貸切バスにて団体参拝します
午前六時半〓ころ集合

十二月四日(土) 報恩講(戸田栄信・西川舜優師)

御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時(昼食)あり
五日 午後一時半〓
六日 午前十時〓 午後一時半〓

四〓十二月 月例会

毎月一日 午後二時〓 日時変更の場合があります、
寺までご確認ください

十一月は二日に
変更します
ご迷惑をお掛けします



奉賛法会 準備中 高田本山

令和五年 五月 二十一〓二十八日

・開山親鸞聖人御誕生850年

・立教開宗800年

・中興真慧上人500年忌

・聖徳太子1400年忌

弥陀のよび声』なもあみだぶつ』を聞いてゆこう

✚ 後記 ✚

〇 「聞く」ということ

一面の終わりは聖人の言葉と決めているのですが、今回は左記です。

撰取不捨の真言、超世の希有の正法、聞思して遅慮することなかれ

《親鸞聖人『教行証文類』総序より》

唐突感があり、なぜこの言葉が頭に浮かんだのか… 考えてみます。

私はずっとこの言葉の意味が分からず、謎でした。

私のポンコツ仏教が謎解きは今だと教えてくれています。

前半は「南無阿弥陀仏の名号」と「撰取不捨の本願の法」が良い。

で後半は、「本願の法」は理性で考えても捉えられない、と訳します。

なので「生活の中で問い続けなさい」ということ… かな。

遅慮とは

・ ああでもない、こうでもない疑い、思い悩み立ちすくむこと。

・ 理性の限界を知らず、空中の理想に照らして納得を求めること。

聞思とは

・ それを在ると断定し、その姿を歩みの中で描き出すこと。

・ 生活の汗や涙、地上の現実に関わり、聞こえた声をただ慶ぶこと。

こうして作文していると、慣用語や引文で誤魔化すことがよくあり、

分かっているかと判ります。

それは私のポンコツ仏教と、表現力の問題でもありますが、

もっと本質的に「言葉」そのものの問題かも知れません。

言葉や論理になった瞬間に、失われてしまうものがあるのでしょうか。

けれど言葉は、分かっていると判り、問いを生む働きもします。

遅慮から聞思への転換はそこで起こります。

すべての命が、それぞれの物語を紡いでいる、これは事実です。

ただ、それを読む者がなければ物語は虚しい。

独断を排し、問いを保ちながら、物語を聞き合うことが大事です。

「撰取不捨の本願」が、必ず慶べると保証しています。